

静岡の高校サッカー 戦後の球跡

49

1965年(昭和40年)度、創部20年目で国体に出

場し、念願だった全国のピッチを踏んだ静岡工。だが、次の県代表の座まで10年間を要することになる。

60年代から70年代の県高校サッカー界は、全国3冠に輝いた藤枝東を筆頭に、清水東、浜名、それに台頭してきた清水商といった強豪がしのぎを削っていた。いわば、群雄割拠の様相だった。

そこに割って入った静岡工は、国体出場から2年後の67年度、2度目の全国行きに王手を掛ける。舞台は全国総体県予選。主将の山

田活郎(アステラス製薬)を中心に、まとまりで勝負するチームは、決勝に進出し、清水東と対戦した。静岡東高で行われたV決戦は、雨中の戦いとなった。前半3分、相手ゴール前の混戦に持ち込んだ静岡工は、右ウイングの小沢義雄(自営)が先制点を生み出して蹴り込んだのは足元のこぼれ球。その瞬間をはいわば、群雄割拠の様相だった。きり覚えていると小沢。

静岡工 ③

- 【1967年度全国総体県予選決勝先発メンバー】
- GK 杉本 静典
- FB 岡田 敏守
- HB 小宮 田中
- FW 小池 沢谷

雨中、再延長の熱戦
静岡工—清水東引き分け

1967年度の雨中の総体県予選決勝第1戦、を報じる静岡新聞(1967年6月26日付)

1967年度の雨中の総体県予選決勝第1戦、を報じる静岡新聞(1967年6月26日付)

目前で消えた総体切符

が、やはり悔しい」と思い起す。

翌68年度は県新人大会で決勝に進み、藤枝北を1-0で下して優勝、スポーツ祭では決勝で藤枝東を2-0で倒し、2本目の優勝旗を手にした。だが、全国行きが懸かった戦いは、総体予選が準決勝で藤枝東に0-2で敗れ、国体予選も決勝リーグで2位に終わって、最後の壁をクリアできなかった。

69年度も総体予選で決勝に進出しながら、清水商に延長の末、0-1で競り負けた。1年からピッチの上でV逸を味わった池谷は、サッカー部記念誌「60年の足跡」に「幾度となく決勝戦まで行きながら全国大会は夢に終わった。何が足りなかったのか」と無念の思いをつづっている。

(敬称略)
(スポーツライター) 加藤訓義